

水の特別賞

六十万人を救った「水」

熊谷市立富士見中学校 三年 橋爪 渉

世界では、約九億人が水不足で苦しんでいると言われている。また、きれいな水を飲めないことで毎日四千人の子どもが命を落としているそうだ。水が豊かな日本では、あまり実感がわきにくいのが、水不足の問題だけではなく水は本来にありとあらゆるところに使われている。

僕は、昨年アフガニスタンで長年、現地住民の生活環境の改善に尽くした日本人医師の中村哲さんの特番をテレビで見た。中村医師は、医師としてだけでなく「一〇〇の診療所よりも一本の用水路」という信念の元、井戸を掘り、用水路建設をすすめ、人々の支援に努めてきた。

きっかけは、二〇〇〇年にアフガンを襲った大干ばつだった。飢餓状態にある者が四〇〇万人、餓死の恐れが一〇〇万人という凄まじい被害が予想された。汚い水を飲まざるをえないので、赤痢や腸チフスにかかる人も続出した。特に子どもたちは下痢が原因で次々と命を落としていった。いくら点滴で水分を補給しても命を救うことはできないという。人が生きるためには、まず水がなければならぬのだ。

アフガニスタンは元々、豊かな農業国だったが、内戦で荒れ果ててしまった。農地と訪ねた中村医師は、「水さえ引けば、農業は復活する」と確信した。こうして、井戸や用水路建設に踏み出すことになったのだ。アフガニスタンに用水路を作ることによって、難民が帰農し、食料問題が解決され、餓死から人々を救う。栄養状態向上で感染症による死亡も減る。水の供給で、様々な問題が解決された。そして、用水路完成後、枯れた砂漠が緑地になり、水が満たされ緑が生い茂る大地がテレビに映し出されたときは、本当に感動した。

僕は、関東平野の北西部の自然豊かな一級河川の流れる荒川の近くで生まれ育った。水の豊かな国に住む僕に出来ることは何か。貴重な水資源を守るため

に、出来る限り水を汚さないことだろう。水道水は、再利用されているが、その使用した水があまりに汚れていると再利用することができない上に、魚などの生物が生きていけないような環境になってしまう。僕達自身も、水不足に陥らないためにも生活雑排水を出来る限り汚さないように意識することが大切だと思う。そして、荒川の自然資源を守り、次世代へと引き継いでいきたい。

世界中の全ての人々が当たり前に安全で安心な水が飲めるような、そんな世界にしていきたい。